

特別企画

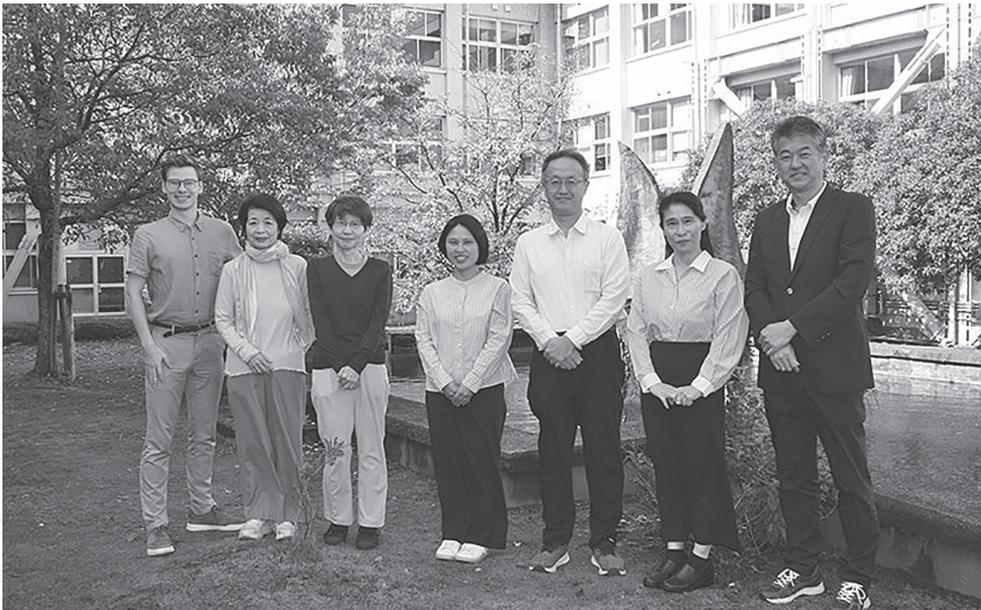
広げよう英語科の輪（福井市）

福井県立道守高等学校 英語科

道守高等学校定時制、道守高等学校通信制の英語科です。

定時制課程は、普通科「午前」・「午後」・「夜間」の3コースが設置されています。各コースともゆとりある時間の中で生徒一人ひとりに寄り添った個別最適な学びを細やかに支援しています。また、本校では「他人に対する思いやりの心を持ち、自己を律して社会に貢献できる生徒」を育てることを目標に掲げています。

通信制課程は、普通科「日曜コース」が設置されています。日曜日に登校し、学校行事を含めて年間約30日実施されるスクーリングと自宅で行うレポート作成が2本の柱です。スクーリング時の面接指導や提出されたレポートの丁寧な添削で学習状況等を把握し、生徒一人ひとりに寄り添った支援をしています。



（左より）Roscoe 岩見 岡山 加藤 宇埜 谷口 西川

●メンバー紹介 ①授業で心がけていること ②リラックス方法 ③訪れてみたい場所

西川 潤也 (総括教頭) -----

- ①教科書の内容を題材に教科書の外へ出かけていくこと
- ②愛犬とのんびりすごすこと
- ③まだ行ったことのない都道府県

岩見 智奈美 (定時制) -----

- ①本文の内容についての実際の映像を用いて理解を深めること
- ②温泉でまったりすること
- ③ジョン万次郎が生まれた土佐清水市

谷口 裕子 (定時制) -----

- ①生徒との対話を大切にし、生徒が学ぶことの楽しさを少しでも感じられるようにすること
- ②韓国ドラマを見ること、YouTube 検索でいつか行ってみたい海外旅行を夢見ること
- ③ペルーのマチュピチュ遺跡。ついでに、ウユニ塩湖にも足を伸ばしたいです。

加藤 香織 (定時制) -----

- ①国内外の異文化に触れる機会をもつようにすること
- ②外で寝そべてお昼寝すること
- ③教科書で知った、オーストラリアのロットネスト島。家族と初めての海外旅行に行きたい。

宇栲 一郎 (通信制) -----

- ①通信制では授業が週1回なので、生徒の自学自習につながるような授業を心がけています。
- ②借りている小さな畑で畑仕事をしたり、Youtube で様々な勉強や娯楽を楽しむことです。
- ③イタリアのポンペイ遺跡。約2000年前の古代ローマの街が火山灰の下に埋もれていた遺跡です。

岡山 佳代 (定時制・通信制) -----

- ①生徒一人ひとりが授業についてきているか確認すること。
- ②読書。雲、星、月、森など自然を見ること。
- ③ウズベキスタン。美しい青いお皿に魅了された。

Ricktts Roscoe -----

- ① I try to have fun in the classroom. If the students can't enjoy the lesson, they won't learn!
- ② I relax by going running and hiking as well as playing video games with my friends.
- ③ I'd love to visit Okinawa and other areas in the southern area of Japan!

福井県立盲学校 英語科

本校には、幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科・保健医療科・専攻科医療科（手技療法コース・鍼灸手技療法コース）の、合わせて7つの学部・学科があります。学校規模は小さめながら、幼児から比較的年配の生徒までが在籍する学校です。英語の学習については、外国語活動から高等学校の英語コミュニケーションまで、幅広い科目・講座設定がなされています。見えにくさへの配慮と多様なコミュニケーションをベースにしながら、少人数ならではの学習を展開しています。



(左から) 吉田将人 平林佐知子 Austin Kim

- メンバー紹介
- ①勤務校で働く魅力とは？
 - ②もぐもぐタイムで食べているものは？
 - ① What do you find appealing about working at Mogakko?
 - ② What do you usually eat during “Mogu-Mogu Time”?

平 林 佐知子

- ①一人の生徒について長期に渡ってその成長を見ることができること。(小学校から高校、さらにその先も)
- ②チョコレート(キャンディボックスに常備) & Bon Coffee

吉 田 将 人

- ①本校ならではの条件下で、授業を組み立てること。
- ②無印良品のバウムクーヘン

Austin Kim

- ①生徒のことをよく知り、一人ひとりにあったレッスンを作ることができる。
- ②バニラカロリーメイトブロックとモンスターエナジー(355ml)。

福井県立ろう学校 英語科



(左から) 藤原 Marcos 羽柴 林

ALT の Marcos 先生に、ろう学校のことを紹介してもらいます。

At Fukui's Rou Gakkou Deaf School, our English classes are heavily focused on interpersonal communication. We have many kind teachers that encourage the students to try their best in English, even if they make mistakes. Students are mainly guided through visual learning and sign language. As such, the students feel safe and confident, and they eagerly try speaking English often. The Deaf School serves students from kindergarten to senior high school, so many different activities are planned for each age group. While the goal for elementary school students is to play games and have fun in English, junior and senior high school students often have the chance to start conversations, discuss topics and ask questions in English in class with our teachers and with the Ruby Club, a group of volunteers dedicated to helping our students enjoy speaking English. I think that the most important thing is to create a chance for students to enjoy using English naturally.

私のお薦めの一冊

茨山良夫 監修 / 福井英語教育懇話編 これからの英語教育 —研究と実践—

1998年 / 東京書籍 / 365pp. / 2,857円 ISBN4-487-75744-4



会長 竹本 俊穂 (足羽高校)

私が若い頃に、県英語研究会の活動とともに先輩の先生方から多くのことを学ばせていただいた別の機会として福井大学の英語教育懇話会があります。月に1回福井大学で英語教員が日頃の実践を持ち寄り発表し、福井大学の茨山良夫先生や大下邦幸先生からご助言やご指導をいただく勉強会でした。この本は、その懇話会が30年を迎え、茨山先生のご退官にあたり出版された論文集です。それぞれの論文は、当時の課題や問題点を取り上げていますが、現在の学習指導要領の先取りをしていたと思えるような内容の一冊です。

英語教育懇話会に参加されていた中学校、高等学校、大学の先生方を中心に24本の論文が掲載されていますが、いくつかタイトルをご紹介します。

- ・英語教育のしくみを考える
- ・生徒が生きる英語授業
- ・生徒が主体的に学習する授業の展開
- ・英語入門期の指導のあり方
- ・生徒の必要に応じた語彙指導
- ・英語授業における2種類のタスク
- ・新しい授業分析の試み
- ・英語教師の研修—英語教育懇話会の歩み—

当時から生徒の英語によるコミュニケーション能力を伸ばすために、中高大の先生方が一緒になってどのような英語の授業を行うべきかを議論していたことが思い出されます。

また、この本とともに、次にご紹介する本をお読みいただければ、福井の英語教育の歩みの一端を知ることができるとともに、生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するために、英語の授業をどのように行うべきかを考える上で大いに参考となります。いずれも本県の中高の先生方が共同執筆者となられており、理論と実践両面から学ぶことが多いと思います。

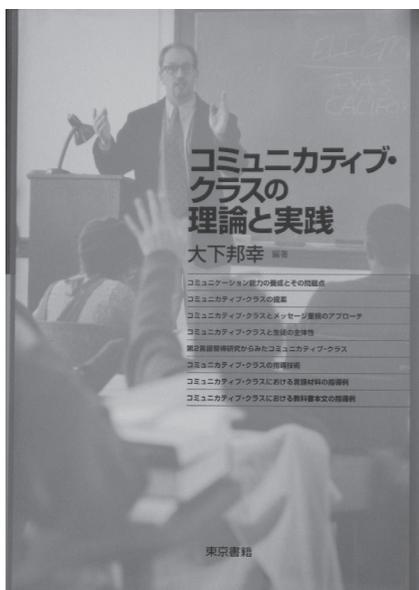
- ・ 茨山良夫・大下邦幸 編著『英語授業のコミュニケーション活動』1992 東京書籍
- ・ 大下邦幸 編著『コミュニケーション能力を高める英語授業』1996 東京書籍
- ・ 大下邦幸 編著『コミュニカティブクラスの理論と実践』2001 東京書籍
- ・ 大下邦幸 編著『意見・考え重視の英語授業』2009 高陵社書店
- ・ 大下邦幸 監修『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』2014 東京書籍

大下 邦幸 編著者

河内 義勝 発行者

コミュニカティブ・クラスの理論と実践

2001年／東京書籍／295pp.／2,500円 ISBN 4-487-79640-7



副会長 西 健（三国中学校）

この本は、「コミュニカティブクラスのすすめ」（2009年発行）の8年前に発行されたものです。コミュニカティブ・クラスとは「授業そのものをコミュニケーションと捉え、英語を媒介として授業を行うことにより、英語知識の獲得とコミュニケーションの場の確保の両方が可能になる授業のあり方」であるとはしがき（p2）に書かれています。まさしく現行の学習指導要領の外国語編と同じ考え方であり、理論や具体的な指導技術、指導例が書かれています。

「Ⅱ 実践編」の第1部 コミュニカティブ・クラスの指導技術（p124～p230）では、下記のような具体的な工夫が書かれています。

- ・ CC の入門期の指導
- ・ CC 実現のための基礎的指導
- ・ コミュニケーションを促す発問の工夫
- ・ 生徒の限られた英語力を補う工夫
- ・ コミュニケーション・ストラテジーの指導
- ・ CC におけるフィードバックのあり方
- ・ 質の高いコミュニケーションを実現する工夫
- ・ 生徒の生活に関連したトピックとその授業構成
- ・ 教科書本文の内容を重視した年間指導計画の作成
- ・ 生徒の問題意識を高めるための補助教材の利用
- ・ 一人ひとりに光が当たる授業の工夫

特に、「CCにおけるフィードバックのあり方」では、言語形式と発話内容に焦点を当てたフィードバックについて書かれています。肯定的なフィードバック、支援的なフィードバック、明示的なフィードバックを使い分けることにより、生徒の英語をより高い次元に導くことができると書かれています。

近年の授業参観を通して感じていることですが、授業開始後の chat、授業後半での意見や考えをやり取りする活動等において、これらのフィードバックがうまくなされておらず、生徒が話す英文に変容が見られない活動を見受けまます。英語を話す活動を行っているのに、言語形式と発話内容に変容が見られないのです。先生方には、活動の間に適切なフィードバック（中間評価）を行ってほしいと感じています。その点で、「CCにおけるフィードバックのあり方」はとても参考になります。

昨年度の Bookshelf では、大下先生の「コミュニカティブクラスのすすめ」を紹介させていただきました。どの本も発行から10年以上が経過していますが、現在の英語授業においても活用できる理論・工夫等が満載です。

若手・中堅の英語教員の皆様におかれましては、大下先生の本を読んでいただき、英語を使って意見・考えを伝え合い深め合う授業をするための理論や工夫、指導のあり方等について学んでいただきたいと思っています。

コミュニカティブクラスのすすめ	大下 邦幸 編著	東京書籍
意見・考え重視の視点からの英語授業改革	大下 邦幸 監修	東京書籍
意見・考え重視の英語授業	大下 邦幸 編著	高陵社書店

今井 むつみ 著

英語独習法

2020年／岩波新書／282pp.／968円／ISBN978-4-00-431860-6



企画部副部長 吉田 充宏（高志中学校）

「どうやったら英語ができるようになりますか。」私がこれまで生徒から受けてきた質問で、恐らく最も多いのがこれである。英文法を復習し盤石にすること、英単語を補強すること、シャドーイングで耳を作り、自信を持って使える表現を定着させること、定期的に英作文の添削指導を受けることなど、生徒の習熟度に応じて種々のアドバイスしてきたつもりではある。結果、実際に英語力を伸ばした生徒もいれば、そこには至らなかった（うまく導けなかった）生徒もいる。確かに、生徒の努力の度合いが結果を分けた面もある。ただ、本書を読み進めるにつれ、これまでの私の助言は本当に適切であったのか、もっと効果的な助言ができたのではないかと、反省とともに自問を繰り返した。

本書の前半では、記憶や情報処理の仕組みが英語学習にどうかかわっているかが説かれ、身体に染み付いた無意識の知識とでも言うべき「スキーマ」についての、詳細かつ分かりやすい解説が続く。そして、日本語スキーマを克服し、英語スキーマを身体化していくために、両者のズレを意識しながら英語のスキーマを「自分で探索していくこと」の重要性が示される。後半では、その具体的な方法が4技能の観点から解説されている。SKELLやCOCAといった、オンラインで簡単に使える英語学習ツールの活用法についても詳細に書かれており、独学で英語を「深く」学ぶための手法を鮮明に提示してくれる内容となっている。

印象深かったことの一つは、多読や多聴は神話であり、英語「運用能力」を全般的に高める万能薬ととらえることは間違いであるという指摘である。私はこれまで生徒に多読や多聴を勧めたこともあるが、そこにこの「万能薬」的な効用への期待もあったことは、正直否定できない。耳の痛い話であった。

この本を読み終えたからと言って、生徒に対して著者のように的確に独習法をアドバイスできる自信はないが、少なくとも英語スキーマの存在（もちろん日本語スキーマも）を念頭に置き、その構築につながるような助言をしていけたらと思う。同時に、自身も英語スキーマの拡張を目指して、「英語独習」を続ける教師でありたい。

お恥ずかしいことに読書が得意でない私であるが、それでもフムフムと頷きながら読み進めることができるほど、学びの機会に満ちた本であった。ぜひご一読いただきたい。

池田 光史 著

ビジュアル解説・今こそ AI 英語術 ChatGPT で英語学習を再加速せよ！

2024 年 / NewsPicks



広報部副部長 織田 昌宏 (高志高校)

「ビジュアル解説・今こそ AI 英語術 ChatGPT で英語学習を再加速せよ！」は、ChatGPT をはじめとする AI が私たちの英語学習をどのように変え、加速させるのかを具体的に示した一冊です。

本書の最大の魅力は、ChatGPT の具体的な活用方法が詳細に解説されている点です。単なる AI の紹介にとどまらず、英会話練習、作文添削、翻訳、リスニングなど、英語学習のあらゆる場面で ChatGPT をどのように活用できるのか、具体的なプロンプト例やノウハウが満載です。

本書で特に印象に残ったのは以下の点です。

- ChatGPT の多様な活用法：英会話練習だけでなく、論文作成やプレゼン資料作成など、ビ

ジネスシーンでも活用できる幅広い可能性が示されています。

- 具体的なプロンプト例：ChatGPT の活用には、適切なプロンプト作成が重要です。本書では、様々な目的に合わせたプロンプト例が多数紹介されており、すぐに実践できます。
- 他の AI ツールとの比較：ChatGPT だけでなく、DeepL などの他の AI ツールとの比較もされており、それぞれのツールの特徴と使い分けがわかりやすく解説されています。

本書を読むことで、以下のことができるようになります。

- ChatGPT を英語学習に効果的に活用する方法を学ぶ
- 英語学習の効率を大幅にアップさせる
- AI 時代の英語学習の新しい可能性を知る

「ビジュアル解説・今こそ AI 英語術 ChatGPT で英語学習を再加速せよ！」は、AI 時代の英語学習の入門書として最適です。本書で紹介されている方法を実践することで、短期間で英語力を向上させることができるでしょう。

と、ここまでこの書評を書いてくれたのは Google Gemini です。いかかでしたでしょうか。

生成 AI は非常に便利です。私も英作文の添削や、作問に活用しています。この表現どうなんだろう、あと数問足したいな、というときには一瞬でやっつけてくれます。ですが、この方たち、たまに間違えることがあります。やはり最後は私たちのチェックが必要です。当然そのチェックにはそれなりの英語力が必要になります。

これからどんどん精度が上がってくるにつれて、生成 AI のミスも減ってくるでしょう。活用できる部分はどんどん活用しながら、引き続き私たち自身の英語力向上にも努めていきましょう。この書評も、おかげでいつもの半分以下の時間で完成させることができました (笑)

大修館書店「英語教育」

雑誌：英語教育（月刊誌）



研究部長 村 昭信（三国高校）

本年度紹介しますのは大修館書店発行の「英語教育」です。英語科の教員でしたらご存じかとは思いますが、もし過去に購読されていて最近では読んでいないという方がおりましたら、そういう方向けにご紹介いたします。

私自身、毎月購入して読み始めたのは2017年度からで、それまでは不定期購読でした。研究部の副部長になって5年が経ち、年齢も40代半ばになり、校務にかまけてあまり英語教育の研究に関心が薄れてしまっていた頃だったと思います。そこで、今の英語教育で問題になっていることや研究されていることを知っておこうぐらいの気持ちで手に取ったことを覚えています。

最近の紙面の特徴として、いつぐらいからなのか、最初の10数ページがカラーになり、特集記事でも今時のテーマが見られるようになりました。Chap GPTに代表されるAIの活用、デジタル教科書やロイロノートなどICT活用についてテーマを立てて紹介されていたり、毎月の連載記事として取りあげられたりしています。さらに、記事にはQRコードがついており、記事の内容に関するワークシートや動画等を入手でき、授業実践に参考にできるようになっています。個人的には生成AIの活用に興味があり、生徒の英作文を添削する際にうまく利用できないか考えるようになったのですが、これもこの雑誌の記事がきっかけです。

福井の先生方が寄稿されていることもたまにあり、目にするると自分のことのように嬉しくなります。2024年発行のものに限りますと、「英語教師の仕事術」（1～3月号：三国中学校 江澤先生）、「『探究コーラル・マップ』がもたらした高次のディスカッション（高1）」（10月号：三仙先生：藤島高校）といった投稿が掲載されました（他にありましたらすみません）。福井県の先生方の知見が全国の先生方に届いていると思うと、大変誇りに思います。

この会報にもある「BOOKSHELF」が、毎月「英語教育」の中にもコーナーが設けられており、小中高大の英語の先生がいろんなジャンルの本を紹介しており、購入のきっかけにもなります。また、大修館書店の新刊紹介もあり、そこから読みたい本の選択も広がり、実際に購入したいと思うものに出会ったりもします。私自身もこれまでも結構この紹介を見て購入に至ったものもあります。

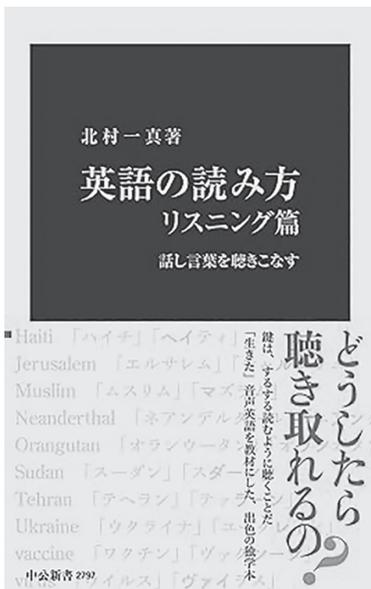
英語科教員が読むものとしてバランスが大変よく、最新研究（論文紹介）、実践報告、英語の知識、今時のICT活用など読者を飽きさせないコンテンツとなっており、編集者の方も特集のネタを探すのに大変な思いをしているのだろうなあとと思います。お値段ですが1冊税込みで957円です。年間定期購読すると割安になり、iPad、iPhone用の電子版の購入もできるようです。手軽に手に取れる雑誌だと思いますので、英語科教員として自己研修の1つにはいかがでしょうか。

北村一真 著 英語の読み方

2021年／中公新書／241pp.／902円／ISBN: 978-4121026378

英語の読み方 リスニング篇

2024年／中公新書／217pp.／924円／ISBN: 978-4121027979



2019年『英文解体新書』(研究社)、2021年『英文解体新書2』(研究社)、2023年『文法知識と読解力を高める 上級英文解釈クイズ60』(左右社)と、旺盛な執筆量で一読三嘆有益英文解釈英文法啓蒙書を陸続と刊行する北村一真氏。今年も魅力的書物を上梓してくれた。

『英語の読み方』は2021年に刊行され、大学受験レベルの英文法・英文解釈力を実用レベルに向上させるノウハウを解説している。新聞・ニュースを扱った「第3章 時事英文を読む」では‘時事英文を読むための5つの法則’を紹介し、「第4章 論理的文章を読み解く」ではラッセル、ショーペンハウアー(英訳)、ダーウィン等を素材に、文章構成に着目しながら‘読み方’を伝授していく。北村氏は論ずる対象を明確かつシンプルに整理し、かつ実

際の英文で平易に具体的に例証・説明しているので、読んでいて頭の中がスッキリして、一気に自分の頭が良くなったように思えてくる(笑)。仕上げの「第5章 普段使いの英文解釈」では、オーウェル『1984年』とポー『黒猫』を素材に、時事英文や評論文から更に一段高いレベルの英文の読解術を、快刀乱麻の如く解説してくれる。英語教師としては、生徒に一段高い英文解釈力をつけさせるノウハウについて、実践的示唆を多々与えられる一冊である。

2024年に刊行された続編『英語の読み方 リスニング篇』は、リーディングの訓練をリスニング力向上に結び付ける方法論を開陳している。第3章は方法論解説の中核を成し、リスニング力向上のためには「予測の力」が不可欠という観点に立ち、「具体的にどのように英文に向き合えば後に続いて出てくる文法構造を先読みできるのかを、動詞による構造の予測、名詞による構造の予測、大きな主語への対処法、従属節への対処法という4つの点から解説」していく(p.60)。そして、「英語を前から語順通りに読んで理解していくための英文解釈の方法論はそのままリスニングにも応用できるものなので、まずはそのような読み方を自分の頭に徹底的に叩き込みたいという場合は、英語を直読直解するための思考プロセスを詳しく解説した英文解釈書が有益な教材」と総括し、伊藤和夫著『英文解釈教室』と自著『英文解体新書』を推奨している(pp.113-114)。

リーディングを土台にしたリスニング学習法というのは一見意外に思えるが、本書を読み通すと極めて理に適った方法論であり、リーディングの延長にリスニングがあることを自然と納得する。もう一つ本書が斬新な点は、素材がニュースやレクチャー、スピーチ、インタビューといった知的レベルが高いものが大半を占めていること。加えて、第3章以降では全ての英文素材にQRコードが付いていて、動画や音声で英文を実践演習出来るのが大変有難い。

リーディング力を梃子にしてリスニング力養成に活かし、さらにアカデミックな内容の「生きた英語」に触れてモチベーション・アップに繋いでいく。本書は一石三鳥の有益な新書で、これが千円で御釣りがくるとは安すぎる。

山本史郎 森田修 著

【増補改訂版】英語力を鍛えたいなら、あえて訳す！

2024年／アスク／222pp.／1760円／ISBN: 978-4866397993



恋人と別れたばかりのジーンが、一人所帯の買い物をするべくスーパーに行く。休日とあってレジは混んでいて、列の前にはカートに山のように商品を積んだ客がいる。ジーンは内心舌打ちしてこう思う…。
Somewhere at the bottom, there was always a plastic carton of eggs or a see-through tray of tomatoes which fell casually to the rest.

さて、この英文をどう訳すか？

解答例「底のどこかに、他のものの犠牲になった卵のプラスチックケースやら、トマトの透明トレイが、いつもあります」。著者曰く、文法は正確に捉えているし、個々の単語の訳も間違っていないが、全体としては“見事にはずしてる！”

では、修正した解答「底のどこかに、ほかのもの

の下敷きになってつぶれたプラスチックケースの卵や、透明トレイのトマトがいつもある」はどうか？山本氏の講評一和訳としては合格かもしれないが、本当の意味でこの英文を読みつくしていない。ジーンはなぜこのようなことを思っているのかと云う疑問を頭に浮かべ、それに答えていなければならない。

満を持してそこで提示された正解はというと……本書 p. 13を見ていただきたい。

英語を正しく理解するには、学校英文法の基礎知識＋英和辞書だけでは不十分な場合がある。だから、*The New York Times* や *The Guardian* の文章を真の意味で「読む」ことが出来るようになるには、“なぜこんなことを言ってるんだろう？”と常に考え、その問いに答えようとする習慣が必要である。そのために、「いちおう訳したものをもう一度眺め直して、改めてそれが“どんな意味”なのかを考えて、納得するというプロセスが欠かせません」(p. 4) というのが山本氏の主張である。

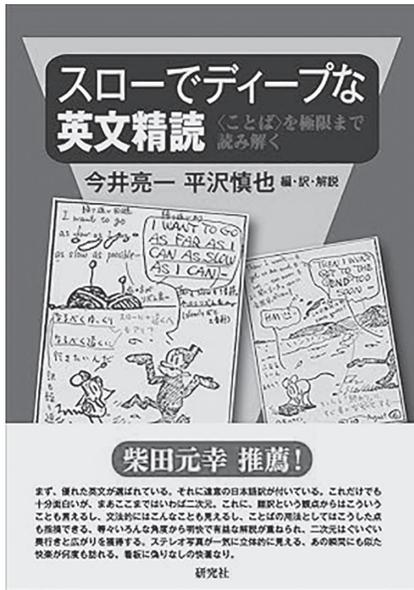
もう一つ例を引いてみよう。表紙には、「この文を正しく訳せますか？ Your son is struggling in math.」とある。「あなたの息子は数学で戦っています」では具体的に何を言っているのかイメージできないし、「数学の勉強をがんばっている」という前向きなニュアンスで捉えては誤読になる。では、正解は？著者はこう解説する—struggle は単に「争っている」だけではなく「苦戦を強いられていて、勝つのは厳しいかもしれない」というニュアンスが伴うので、「息子さんの数学の成績が問題です」と訳すと、原文のニュアンスを余すことなく自然な形で伝えられる (pp. 188-189)。

山本史郎氏は2023年に『翻訳論の冒険』という名著を刊行された方で(『会報』第82号で既紹介)、本書は2011年に日本経済出版社より刊行された『英語力を鍛えたいなら、あえて訳す！』に加筆修正した増補改訂版である(旧版について、X でのある投稿が35,000以上の“いいね”を集めバズったことが、本書復刊に繋がったという)。クイズ形式で問われる英文を「あえて訳す」ことで「英語力を鍛え」ていく、そんな面白くてためになる好著の再登場を喜びたい。

今井亮一 平沢慎也 編・訳・著

スローでディープな英文精読 〈ことば〉を極限まで読み解く

2023年／研究社／258pp.／2420円／ISBN: 978-4327453169



本書「まえがき」の結びにこうある——「本書は速読術を提供するものではないし、数百の単語や中学の英文法さえ覚えれば英語がわかるといったお気軽さを演出するものでもない。それゆえ本書は「スローでディープ」という、速さと浅さの対極のことばをタイトルに冠している。ぜひ英語の甘美なる底なし沼に、ゆっくり深く沈んでいってほしい」(p. 5)。

どうです、そそられる宣伝惹句ではないですか?! 本書の頁を繰って、柴田元幸氏が編集した傑作シリーズ『英文精読教室』全6巻(研究社)を連想した人も多いと思うが、それもその筈、著者2人は柴田氏の直弟子なのである。ただ、『英文精読教室』が文学解釈に主眼を置いていたのに対し、本書は(副題にもあるように)〈ことば〉を極限まで——スローでディープに——読み解くことが目的であり、そ

のために詳細(過ぎるくらいの)語注、翻訳の視点、文法解説、本文解説と、手取り足取り多角的に英文の理解を深められるように構成されている。前半“第I部 ことばのいろいろ”では英語と日本語に関するエッセイ(の抜粋)を2篇ずつ掲載し、後半“第II部 いろいろなことば”には漫画、小説、現代詩を1作丸ごと収録している。

例えば、「逆接の接続詞 *but* と逆接の副詞 *still* の組み合わせ」の解説・分析(pp. 26~28)。具体例として、小説やドラマから4つの場面を引用して実際の用法を読んでいき、以下のように論理的に結論を下す:〈主観的評価〉を明示・暗示→〈主観的評価〉を覆しうる事柄の提示→*but still*(そうはいってもやっぱり〈主観的評価〉)。*but still*を「そうはいっても」と機械的に覚えるだけでは不十分で、こうして実例の中で遭遇して初めて、どういうコンテキストで用いるのが実感できるのであり、本書にはこのような実例・解説・蘊蓄がてんこもりである。

あるいは、Ted Goossen “Haruki Murakami and the Culture of Translation”を取り上げた第4章。*The Great Gatsby*に出てくる‘old sport’を村上がどう処理(翻訳)したかについて、翻訳研究の中核を成すコンセプト「異化 *foreignization*」と「同化 *domestication*」についてまず論じる(pp. 92-93)。次に、‘having been read by so many for so long, the “Murakami style” now feels quite normal」という一節を俎上に載せて、定番構文 *so ... (that) ~*を「とても ... なので~」と覚えるのは誤っていることを、論理的に検証する(pp. 96-100)。そして、‘Had translator Alfred Birnbaum been given the option,’を例にとって、*Had*の一語を見た瞬間「たぶん仮定法過去完了の *if* なし倒置のパターンが続くのだろう」と予測できるのは何故かを、解説する(pp. 100-102)。

文化的背景の論考も「スローでディープ」極まりない。第5章では、*conformity* という一語をめぐる、1950-60年代のアメリカ文化を包括的に且つ詳細に分析してみせる。また第7章は——ロートレアモンの解剖台のミシンと傘の偶然の出会いではないが——スヌーピー(*Peanuts*)とアレン・

ギンズバーグ (Howl) というどう考えても水と油の組み合わせを超絶技巧で融合させるマニアックな異色作を、微に入り細を穿つように分析する *tour de force* を披露する。

というわけで、類書 (= 英文精読の学習書) にはまず出てこない7つの多彩なジャンルの英文を読みながら、「英語の甘美なる底なし沼に、ゆっくり深く沈んでい」けること間違いなしの一冊である。

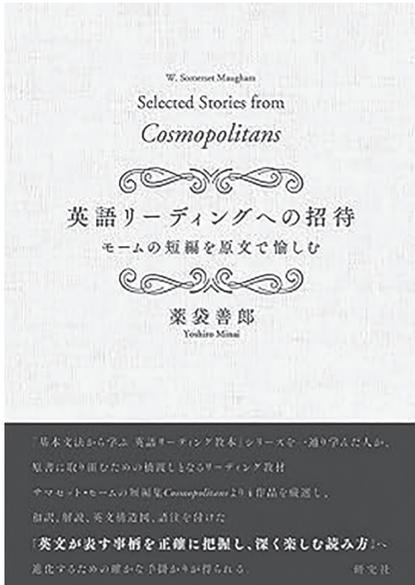
葉袋善郎 著

基本文法から学ぶ英語リーディング教本

2021年／研究社／488pp.／2860円／ISBN: 978-4327453053

英語リーディングへの招待 モームの短編を原文で愉しむ

2024年／研究社／296pp.／2530円／ISBN: 978-4327453183



葉袋善郎（みない よしろう）氏が2000年に刊行した『基本からわかる 英語リーディング教本』（研究社）は、英語学習者に多大な衝撃を与えた。初めて見る英文の構造を誤りなく認識できる力を身につけることを目標とし、「本書をしっかりと勉強すれば、例外的な現象を含まない限り、すべての英文の構造をきちんと把握できるようになる」（と著者が断言する通りの）優れものであり、筆者などは伊藤和夫『英文解釈教室』以上の衝撃と知的興奮を体感した。本書が圧倒的支持を受けたのに応え、2021年には中学レベルからスタートする『基本文法から学ぶ英語リーディング教本』（通称“黄リー教”）が上梓され、これもロングセラーとなった。

さて、『英語リーディングへの招待』は、W. Somerset Maugham が1936年に発表した短編集 *Cosmopolitans*

から ‘The Happy Man’, ‘The Luncheon’, ‘The Ant and the Grasshopper’, ‘Mr Know-All’ の4篇を選び、「英文読解の学習書（黄リー教）と原書の「橋渡し」をする本」である。つまり、構造の複雑な文を（黄リー教のメソッドに基づいて）誤りなく認識し、それと併せて、細部まで正確に事柄を説明することで登場人物の心理や大作家モームの妙手を愉しもうと云うハイブリッド構造になっている。

黄リー教メソッドによる英文構造把握の一例を挙げてみよう。‘The Ant and the Grasshopper’ で主人公トムについて言及した一節 I have never met anyone to whom it was more difficult to refuse a loan. について、葉袋氏はこう問う——「この文の to whom は2つの異なる部分を修飾する可能性がある。ひとつは more difficult を修飾する可能性で、もうひとつは to refuse a loan を修飾する可能性である。それぞれの場合、トムはどういうたぐいの人として描写されているか？また、この作品ではどちらの修飾関係が正しいか？」。解答は本書 pp. 82-85を御参照いただきたいが、一点の曇りもなく論理的かつ明晰に為される説明は、読んでいて清々しい気分さえなる。

次は、読みの深さを如実に示した一例。‘Mr Know-All’ の一節 Mr Kelada’s brushes, ebony with his monogram in gold, would have been all the better for a scrub. (ケラーダ氏のブラシは名前を金色の組み合わせ文字ではめこんだ黒檀製のものだったが、汚れていて、ごしごし拭いたらいっそうよくなるだろうにと思われた。) を正しく読むために、the narrator が語ることは必ずしも客観的な真実ではないこと、物語・登場人物の背景、モームの技巧、フィクションとメタフィクション等々を論じ、果ては the principal of charity (善意解釈の原理) という現代哲学の概念まで引っぱり出してきて、疑問の余地が生じぬよう11頁にわたって徹底的に理詰めで分析・解釈していくのである (pp. 114-124)。成程、大まかに粗筋だけ辿る読みに留まらず、さらにさらに深く愉しく読んでいく醍醐味と

はこういうことなのかと、身を以て学ぶことになる。

ちなみに、後で御紹介する行方昭夫氏は『英文読解術』で‘Mr Know-All’全篇を講義しており、行方氏の訳は（ケラーダ氏のブラシは、金色の合わせ文字のある黒檀製で、髭剃りよりも、体を擦れば、もっと具合がいいようだった）となっている。この一文の二通りの〈読み〉を比較検討すると、一層興味が湧くこと間違いなし。

斎藤兆史 高橋和子 著

名場面の英語で味わう イギリス小説の傑作 英文読解力をみがく10講

2024年／NHK 出版／254pp.／2090円／ISBN: 978-4140351864



「はじめに」で、斎藤氏は本書は「傑作イギリス小説の原文を味わいながら英語を勉強するための学習書」と述べる。その具体的な学習手順はというと・・・1) 日本語訳を読み各場面の大きな流れを理解→2) 語注を適宜参考にして原文を一文一文精読→3) 文法的に難しい箇所は「語法・文法解説」で自分の理解を確認する→4) 名場面において名文句がどのような役割を果たしているかをじっくりと鑑賞する——となる。

講義されるのは、オースティン『高慢と偏見』、ブロンテ『ジェイン・エア』、ハーディ『ダーバヴィル家のテス』、フォースター『インドへの道』、ウルフ『ダロウェイ夫人』、イシグロ『日の名残り』等、19世紀から20世紀末までの長編小説十篇。英文学の傑作中の傑作を味わって読むことで英文読解力を高め、読解力を高めることで作品世界をより深く緻密に味わうと云う、謂わば往還的読みを目指す指南書である。

では、その「往還的読み」が本書でどのように展開するか、具体的にみてみよう。Lesson 4ブロンテ『嵐が丘』では、次の場面が引用される：‘... my great thought in living is himself. If all else perished, and he remained, I should still continue to be; and, if all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. ...Nelly, I am Heathcliff—he’s always, always in my mind—not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself—but, as my own being’.前半では、反実仮定の仮定法過去が2つ用いられ、キャサリンがヒースクリフに対して抱く狂おしいまでに激しい愛が、凝縮されて表現されている。だからこそ、その後の I am Heathcliff. 「私はヒースクリフそのものなの」という言葉が、二人の深い繋がり（一心同体）を表す名台詞として強く読者の胸を打つ。また引用箇所後半では、not A but B 構文と not ... any more than の“クジラ構文”が使われ、ヒースクリフの存在を比喩的に語る。仮定法や否定・比較構文を教えるなら—— ゆめゆめ If I were a bird, I could fly to you. といった無意味無味乾燥な例文でなく——このような名場面、名文句を通して教えてみたいものである。

Lesson 7 モーム『人間の絆』では、主人公フィリップが知人から寄贈されたペルシャ絨毯の意味を、忽然と悟る場面が採られている。‘Life had no meaning.’ 「人生に意味はない」という一節は、一聴すると虚無主義のように響くが、その後の言葉 “His insignificance was turned to power, and he felt himself suddenly equal with the cruel fate which had seemed to persecute him; for, if life was meaningless, the world was robbed of its cruelty. What he did or left undone did not matter....He was the most inconsiderable creature in that swarming mass of mankind which for a brief space occupied the surface of the earth” まで読み進めると、「ペルシャ絨毯に意味などなくても美しいものは美しいように、人生に

意味はなくとも美しい」と悟るエピファニーを、読者もまた体感して深い感銘を受けることになる。

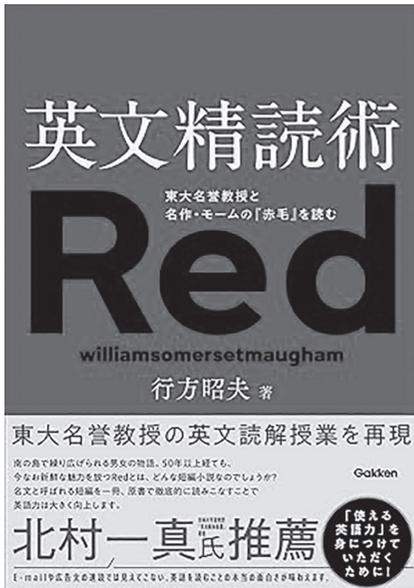
もう一つ、Lesson 9 ウルフ『ダロウェイ夫人』を。「意識の流れ」を駆使しモダニズム文学の頂点に立つウルフは、難解なことでもまた頂点に立つ。この課では冒頭部分を詳細精密に読み解いていき、例えば、倒置構文を用いることでダロウェイ夫人の視点と意識描写がずっと端役に移る瞬間“A charming woman, Scrope Purvis thought her (knowing her as one does know people who live next door to one in Westminster)”に焦点を当て、小説のナラティブの特質を鮮やかに分析してみせる。

恥ずかしながら、筆者は10作品のうち4つしか原文で読んでいないので、いずれ残り6作もじっくり熟読玩味してみたい。

行方昭夫 著

英文精読術 東大名譽教授と名作・モームの『赤毛』を読む

2024年 / Gakken / 244pp. / 1980円 / ISBN: 978-4053058904



著者の行方昭夫（なめかた あきお）氏は東大で長年英文学を講じられ、また同時に名翻訳家として英米文学の訳書を多数刊行されている。本書は、日本モーム協会会長を務める著者が、Somerset Maugham (1874-1965) の傑作短編‘Red’全篇を教材にして執筆した英文解釈参考書で、ディーエイチシーから2015年に刊行された。2024年はモーム生誕150年という記念の年であり、装いも新たにGakkenから復刊された。

「モームは学習者にとって、英語は難しからず、易しからず、内容は非常に面白く、英文解釈の材料として最適です」と推奨する著者は、英文解釈法を懇切丁寧に解説し、加えてモーム文学の神髄をじっくり味わえるよう読者を導いてくれる。

論より証拠、実例を一つ読んでみよう。ある娘のこの世ならぬ美しさを、主要人物の一人ニールスンが、描写力の限りを尽くして賛美する場面である (pp. 134-135)。

That is the love that Adam felt for Eve when he awoke and found her in the garden gazing at him with dewy eyes. That is the love that draws the beasts to one another, and the Gods. That is the love that makes the world a miracle. That is the love which gives life its pregnant meaning.

【試訳】あれは、エデンの園で目を開けたアダムが、濡れた目でイヴがこちらを見つめているのを知って、彼女に感じた恋でした。あれは動物を相互に引き付けあう恋でした、そして神々たち。あれは世界を奇跡にする恋でした。あれは人生に深い意味を与える恋でした。

【決定訳】アダムがエデンの園で目を覚まし、うるんだ目でじっと見つめるイヴを見た時に感じたのが、まさにこの恋です。動物を、いや神々を、互いに引きつけるのもこの恋です。この恋こそ、この世を奇跡に変え、人生に深い意味を付与するのです。

【試訳】は一見すると、語彙の定義と構文把握はほぼ正確と思われるが、如何せん隔靴搔痒という感は拭えない。ところが、【決定訳】を読んでみると曖昧さが雲散霧消するばかりか、行間に込められている意味もはっきり浮き彫りになってくる。【精読】では、同じ単語・表現・構文の繰り返しを嫌う英語の常識に逆らって、That を主語にした同構文を四つ続けることで「正にこの二人の恋こそが」という強調が生きていることを指摘する。そして【決定訳】では、That is the love を最初の三つは表現（訳語）を変え、四つ目は構文すら変えることで畳みかけるようリズムを生みだし、「正にこの二人の恋こそが」という意味合いを格調高く謳い上げていく。真の英文解釈とはここまで緻密な読みと深い分析を求めるものなのかと、本書を読みながら英語を読むことの難しさと愉しさを改めて認識させられること必至である。

なお同時に復刊された2冊についても簡単に御紹介しておく。『英文翻訳術』はモーム‘The

Colonel's Lady'『大佐の奥方』を取り上げ、試訳から翻訳に至るプロセスを分かり易く解説する。また『英文読解術』は、モーム 'Mr. Know-All'『物知り博士』を題材に高校レベルの生徒（読者）を相手に、Q&Aを通じて英文読解力を向上させるスタイルを取っている。3冊揃えれば座右の書となること間違いない。

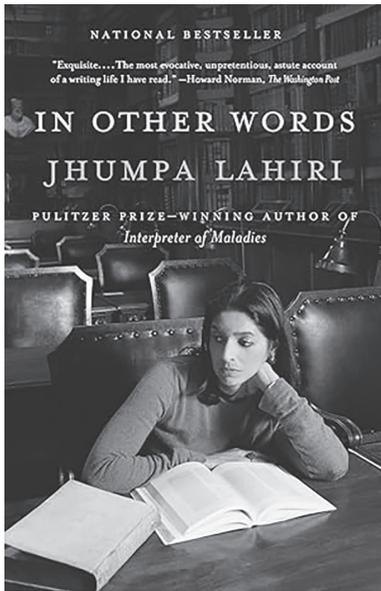
なお私事で恐縮だが、行方氏の翻訳について筆者の経験を一つ記させていただく。Henry James *The Turn of the Screw* と言えば、難解極まりないことで遍く知られた古典であるが、筆者は無謀にも——かのスティーヴン・キングが本書を激賞しているというそれだけの理由で——原書で読んでみたものの、全編雲を掴むような展開でお手上げになった。その後、行方氏の新訳（岩波文庫、2003年）を読んでみて、かの‘意識の流れ’を含め、異常な状況下の登場人物の心理的駆け引きが手に取るように分かり、その見事な翻訳に平伏したのである。

AIが行方氏に匹敵する「翻訳」が出来るようになるのは、今世紀中は到底無理であろう。

Jhumpa Lahiri

In Other Words Vintage / 256pp. / \$16.74 / ISBN: 978-1101911464

Translating Myself and Others Princeton University Press / 216pp. / \$13.99 / ISBN: 978-0691238616



ジュンパ・ラヒリはカルカッタ出身のベンガル人の両親のもとに、1967年にロンドンで生まれる。幼少時に渡米してロードアイランドで育ち、1999年に短編集 *Interpreter of Maladies* でデビューを飾ると、翌年ピューリッツァ賞を受賞して一躍脚光を浴びた。その後も、*The Namesake* (2003)、*Unaccustomed Earth* (2008)、*The Lowland* (2013) と寡作ながらも高い評価を受け、現代世界文学で最も注目される作家となった。ラヒリは二十代にフィレンツェを旅した際、初めて生で接したイタリア語に深く魅了され、旅行後すぐさまイタリア語の勉強を始める。そして2012年には、家族と共にローマに移住して、夢にまで見たイタリア語に浸る生活を始めることとなる。

In Other Words は *The Lowland* の2年後2015年に刊行され、母語ベンガル語、第一言語の英語に続き、

第三の言語となった伊語で綴ったエッセイ集である (*In Other Words* はオリジナル版 *In Altre Parole* の英訳本)。「外国語」である伊語を学ぶ過程で戸惑ったり、落ち込んだり、喜びを得る著者の姿は—— レヴェルは比ぶべくもないが—— 同じく「外国語」である英語を学んで日々悪戦苦闘する私たちに、親近感を感じさせるものだ。

例えば ‘The Fragile Shelter’ では、“When I read in Italian, I feel like a guest, a traveler. Nevertheless, what I’m doing seems a legitimate, acceptable task. When I write in Italian, I feel like an intruder, an impostor. The work seems counterfeit, unnatural. I realize that I’ve crossed over a boundary, that I feel lost, in flight. I’m a complete foreigner.” と、外国語と関わる者を永遠の旅人に準えている。その一方で、‘Reading with a dictionary’ では、外国語 (伊語) に対する汲めども尽きぬ愛を赤裸々に語る—— “When you’re in love, you want to live forever. You want the emotion, the excitement you feel to last. Reading in Italian arouses a similar longing in me. I don’t want to die, because my death would mean the end of my discovery of the language. Because every day there will be a new word to learn. Thus love can represent eternity.”

著者はイタリアから帰米後、2015年からプリンストン大学で教鞭を取り、執筆活動を並行して行う。*In Other Words* は伊語を学び、伊語で書く知的営為についての考察が主だったのに対して、*Translating Myself and Others* (2022) は、伊語の小説を英語に翻訳したり、ラテン語で書かれた古典作品を伊語に翻訳する作業に携わりながら思い巡らしたことの、やや硬めの文章が収められている。例えば、Chapter 4 ‘In Praise of Echo’ の一節 “There is no better or more satisfying way to satisfy one’s love for a text than to translate it. To translate a book is to enter into a relationship with it, to approach and accompany it, to know it intimately, word by word, and to enjoy the comfort of its company in return.” などは、英書を読んで感銘を受けた一節、あるいは英語の曲のお気に入りフレーズを日本語に直そうとした経験のある人なら、共感同感することと思う。

Margarett Atwood

The Handmaid's Tale Vintage / 311pp. / \$8.95 / ISBN: 978-0385490818

The Testaments Knopf / 448pp. / \$11.67 / ISBN: 978-0525562627

加藤めぐみ 中村麻美 編

マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む

2023年／水声社／330pp.／3850円／ISBN: 978-4801006850



Margaret Atwood *The Handmaid's Tale* は1985年に刊行された（邦訳『侍女の物語』斎藤英治訳 新潮社 1990年）。マーガレット・アトウッドが米ソ冷戦下の西ベルリンで本書を執筆したのは、1984年——そう、現代世界文学の金字塔 George Orwell *Nineteen Eighty-Four* で物語が展開する年である——で、『侍女の物語』はオーウェルのディストピア小説を下敷きにしているので、敢えてこの年に書いたとされている。

それから35年後、『侍女』の待望の続編 *The Testaments*（邦訳『誓願』鴻巣友季子訳 早川書房 2020年）が刊行された。今度は複数の視点（語り手）によって、物語の舞台ギレアデ共和国の創成期からの歴史を振り返りつつ、このディストピア国家が内部から揺らぎ出していく過程を描いていく。

この2作——特に『侍女』——は、2022年に再び脚光を浴びた。リベラル派ルーズ・ベイダー・ギンズバーグ連邦最高裁判事の死去の後、保守派エイミー・バレット判事をトランプ大統領が2020年に任命し、2022年には女性が中絶する権利を認めた「ロー対ウェイド判決」が半世紀ぶりに覆ってしまったのである。アトウッドが『侍女』で描いた強制出産が現実のものとなってしまう、不幸にもアトウッドの作品が世界から注目を集めることになった。

『侍女』『誓願』の舞台である（架空の）ギレアデ共和国では、現在の米国を予言的に投影したかのように、超保守派による国会議事堂襲撃や、妊娠中絶・避妊の禁止、下層階級の代理出産、女性の厳格な階層化等々が起こっている。『マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む』は、この男女隔離政策独裁ディストピア国家ギレアデを、独裁者、バイオポリティクス、記憶・歴史、エコロジー、ケア・サイborg、声・語り、セクシュアリティ、異性愛／レズビアニズム、フェミニストSF、代理出産といったテーマ（観点）で読み解く論考を収録し、加えてアトウッド自身の講演『『侍女の物語』はフェミニスト・ディストピアか？』を訳出している。

筆者は『1984』および『侍女』『誓願』は、ディストピア小説の枠組みを軽々と凌駕した大傑作と評価しているので、この論考集も非常に興味深く読んだ。小説に限らず、偉大な文学作品は——シェイクスピアがその典型だが——様々な「読み」を許容する懐の深さを有する。各論考は、それだけで一冊の独立した書物として上梓できる鋭い読みと深い考察を提示していて、『侍女』『誓願』はこのような読み・解釈が可能なのか、このような側面が潜んでいたのかと、大いに知的刺激を受けた。そして文学を「読む」究極の愉しみというのは、畢竟こういうことに尽きると、大いに感じ

入った。

実は筆者は、予め *The Handmaid's Tale* と *The Testaments* を久方ぶりに (原書で) 読み直したうえで、本書に臨んだ。読者諸氏も、出来うれば『侍女』『誓願』 二部作でギレアデ共和国のディストピアに震撼した後に、本書を手にとって頂ければと願う。

八木克正 著

名作英文解釈精選 明治～昭和の英語入試問題の原典を読む

2024年／大修館書店／253pp.／2860円／ISBN: 978-4469246742



1960年代初頭まで、大学入試英文解釈のバイブル的参考書であった山崎貞著『新々英文解釈研究』（研究社1925年、通称「山貞」）。「山貞」に収録された入試過去問は難しい問題文が多く、なぜ難しいのかを明らかにすべく、八木氏は数年かけて収録問題ひとつひとつの出典を調べた。その結果明らかになったのは、英文は後期近代英語（Late Modern English 1700-1900）から初期現代英語（Early Present-day English 1901-1920）の作品からとられており、かなりの割合で省略や書換等原文に手が加えられていたことである。今では古くなったり使われなくなった文法や語彙等を始め、成句や構文、表現法を丁寧に解説し、英米文学が花開き発展する時代に活躍した作家の魅力ある作品や文章を再度味わってみよう——これが本書の編集意図である。

第1章では、問題文と出典の原文を照合してどのような異同があるかを確認し、語句や構文を解説する。第2章では、LMEの読解のための基礎知識となる文法や構文等を、項目ごとにまとめていく。そして第3章で、LMEとEPEの英文解釈実践を行っていく。ちなみに第3章に登場する作品は、Franklin *The Autobiography of Benjamin Franklin* (1791) や Hawthorne *The Scarlet Letter* (1850) 等の錚々たる面々であるが、ではこの時期に日本で登場した文学作品は何かというと、上田秋成『雨月物語』（1776年）、十返舎一九『東海道中膝栗毛』（1814年）、滝沢馬琴『南総里見八犬伝』（1842年）などである。だから、日頃現代英語（Present-day English 1901-）で学んでいる人間が、フランクリンやホーソンの文章に接して読みづらさを覚えても、蓋し当然のことなのである。

八木氏は、LMEとPEの間に横たわる隔たりを埋めるべく、第2章では総括的に、第3章では英文中に出てくる毎に逐一丁寧に説明してくれる。例えば、PEでは補語の節を導く *that* の前にカンマを置くことはないが、LMEではごく普通に置かれると解説し、第3章では Darwin *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex* (1871) の一節 'It is no argument against savage man being a social animal, that the tribes inhabiting adjacent districts are almost always at war with each other' でその用法を具体的に指摘する (pp. 178-189)。

現代とは異なる語法・文法の解説も勿論有益であるが、やはり本書の最大の魅力は、「英米文学が花開き発展する時代に活躍した作家の魅力ある作品や文章」を最高のガイドと共に訪れる喜びである。その一例として Hawthorne *The Scarlet Letter* をみてみよう。主人公ヘスター・プリングが、赤子を抱いて牢獄から出てくる場面である。

She was lady-like, too, after the manner of the feminine gentility of those days; characterized by a certain state and dignity, rather than by the delicate, evanescent, and indescribable grace, which is now recognized as its indication. And never had Hester Prynne appeared more lady-like, in the antique

interpretation of the term, than as she issued from the prison.

この場面の、痒い所に手が届く素晴らしい解説を知りたい方は、本書第3章 pp. 124-134を御参照いただきたい。

葉袋 善郎 著

ミル『自由論』原書精読への序説

2020年／研究社／280pp.／2420円／ISBN: 978-4327490256

ミル『自由論』原書精読2 行動制限の原理

2024年／研究社／293pp.／2530円／ISBN: 978-4327490270



まず、『自由論』原書精読2』「本書はどういう本か」からの抜粋をお読みいただきたい。

本書は『自由論』第一章後半の全英文について「構造（品詞・働き・活用）」と「内容（事柄・イタイコト・論理関係）」の点でわかりにくい個所、誤解しやすい個所をくまなく取り上げて、それを詳細に解明した本です。

一例を挙げましょう。本書に収録した部分に次の英文があります。

(1-07-05) The only case in which the higher ground has been taken on principle and maintained with consistency, by any but an individual here and there, is that of religious belief: a case instructive in many ways, and not least so as forming a most

striking instance of the fallibility of what is called the moral sense: for the *odium theologicum*, in a sincere bigot, is one of the most unequivocal cases of moral feeling.

『自由論』の最新の翻訳（岩波文庫、関口正司訳、2020年）は、この英文を次のように訳しています。

個人によるあちらこちらでの企てを別にすれば、高い水準の原理や主張の一貫性に達していた唯一の事例は、宗教的信仰である。これは多くの点で教訓となる事例だが、いわゆる道德感情というものの可謬性に関する非常に際立った例となっている点で、特に教訓的である。なぜなら、真剣で、しかも頑迷な信仰者が抱く神学上の憎悪は、道德感情というものの明白この上ない一事例だからである。

これはいったいどういうことを言っているのでしょうか？この原文と翻訳を読んで心の底から「わかった！」となる人がどれだけいるのでしょうか？これは原文に飛躍があるために、事柄と論理関係を把握するのが難しいのです。

本書はこういう英文を徹底的に考え抜いて、具体的な事柄（＝事実関係）の次元で内容を明らかにした本です。（pp. 2-3）

葉袋善郎氏が初めて『自由論』に出会ったのは高校2年生のときで、爾来『自由論』を一点の曇りもなく理解したい」というのが氏の念願となった。十数年前、『自由論』の解明に取り組む時間的余裕をようやく持てたものの、自分が納得できるレベルで読めるイギリス人にはなかなか出会えなかったが、偶然、Trinity Collegeで教鞭を取ったDavid Chart博士と出会い、教を乞うことが

叶った。それから毎週1回2時間ずつ7年間、総計700時間を超える講義と議論を重ね、疑問点がすっかり解消したのが2018年のこと。『自由論』自体を正確に読みたいと思っている人は少ないかもしれませんが、このレベルの英文を正確に読みたい人はたくさんいるはず」と考えて研究社に話をもちかけ、2020年に『ミル『自由論』原書精読への序説』（以下『序説』と略記）が上梓されるに至った。

筆者は葉袋氏の著作をほぼ全て読んでいて、論理的に一転の曇りもなく英文を読んでいく読解法（英文解釈術）に深く大きく敬服信奉傾倒し、自分の英文解釈力鍛錬の点で多大な影響を受けてきた。その葉袋氏の新著だからと早速——気軽に——手に取ったものの……これはもう想像を絶する世界であった。

では実際に、その想像を絶する世界に足を踏み入れてみよう。

まず一番最初の英文（第1章第1節第1文）The subject of this Essay is not the so-called Liberty of the Will, so unfortunately opposed to the misnamed doctrine of Philosophical Necessity; but Civil, or Social Liberty: the nature and limits of the power which can be legitimately exercised by society over the individual. の解説で大いに面食らう。通常の訳文ならこうなる。

本書のテーマは、いわゆる意志の自由ではない。本書で論じるのは、誤解されやすい哲学用語でいう必然にたいしての意志の自由ではなく、市民的な自由、社会的な自由についてである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその限界を論じたい。（斉藤悦則訳『自由論』光文社古典新訳文庫、2012年）

このような和訳は、「単に字面を訳しただけの状態」であると、原文および翻訳の字面には表れない「具体的な事柄」と「文と文の論理的つながり」を明らかにした〈訳〉が以下の文章である（なお網掛け部分は、英文の字面に表れていない「事柄」や「論理的つながり」を補った箇所である）。

いわゆる「意思の自由」は「哲学的必然」論と対立するものとされている。しかし、これは実に不幸なことである。なぜなら、この2つは本当は相容れないものではないからである。それでは、なぜこのような不幸な誤解が起こるのであろうか？それは「哲学的必然」という名称が内容を適切に表していないからである。「哲学的必然」論の本当の内容は、「意思の自由」を排斥するものではないのだが、「哲学的必然」という不適切な名称を冠せられているために、この名称を聞いた人は、この論の内容を誤解してしまい、その「誤解された内容」が「意思の自由」と対立するのである。ところで、以上のことはこの論文とは無関係である。この論文のテーマは「意思の自由」ではなく、「市民の自由」すなわち「社会における個人の自由」である。詳しく言えば、社会が個人の上に合法的に行使できる力の性質と限界である（『序説』 pp. 49-53）。

恥を忍んで告白するが、筆者はこの箇所に接した時半泣きになって、読むのを断念しようかという気になった。しかし、幾ら何でも最初の1文で挫折したとあっては英語教師の沽券に関わると、以後は1日数頁ずつ蝸牛の歩みのように読み進めていった。

『自由論』の内容は哲学的・観念的で超難解なのに加えて、英文も凝縮度が高く大学入試の比ではない。その難解な英文を相手に、葉袋氏は言語学的に一つ一つ詳細精密論理的誤謬なく分析し、執拗かつ超クドク解説していく。

例えば、(1-02-06) Their power was regarded as necessary, but also as highly dangerous; as a weapon which they would attempt to use against their subjects, no less than against external enemies. では、A is no 比較級

than B is. を7つのパターンに分類し、事細かく違いを見ていく（『序説』 pp. 78-82）。

しかしこれなどほんの序の口小手調べに過ぎない。

(1-02-08) But as the king of the vultures would be no less bent upon preying on the flock than any of the minor harpies, it was indispensable to be in a perpetual attitude of defence against his beak and claws. では、no less bent...than という比較表現について、何と12頁にもわたって S is no 比較級 than any (other) …の分析・解説を講義するのである（！）。比較構文はとりわけ国公立大二次試験でも頻出する文法事項なので、筆者も大方の理解はしていたつもりだったが、葉袋氏の解説を目の当たりにすると、釈迦の掌の上の孫悟空と云う気分以自己嫌悪に陥ってしまった（『序説』 pp. 83-94）。

もっと凄い例がある。

(1-03-14) A similar tone of sentiment might by this time have been prevalent in our own country, if the circumstances which for a time encouraged it, had continued unaltered. を精読解析していくと幾つか疑問点が生じると著者は述べ、論理的整合性を一つ一つ丁寧に検証していく。その結果、by this time については「ちょっと信じられませんが、結論は「おそらくミルが書き間違えた」のです。（中略）おそらくミルは at this time と書くところを、うっかり by this time と書いてしまったのでしょう」と結論づける（『序説』 pp. 125-136）。これには吃驚仰天驚天動地啞然とした。英語を母語にする相当知的レベルの高い人間でも易々とは読みこなせないであろうミルの論文を、極東の地の学徒がその書き間違いを指摘するとは！著者の英語解析力の完璧さと推論力の凄さには、もう形容する言葉が見つからない。

ちなみに『序説』は第1章第6節までしか扱っていないので、読者の熱い要望を受け、第1章第7節から第1章最後16節までをカバーした続編『ミル『自由論』原書精読2 行動制限の原理』（以下『精読2』と略記）が、4年後の2024年に目出度く刊行された。『序説』は英文法面の解説が比較的多いが、『精読2』ではミルの「論」自体の解析・解説が増えてきて、ミルの唱えた功利主義について、著者に導かれて一步一步近づいていくことになる。

例えば、社会の改良について言及した箇所。

(1-10-05) The early difficulties in the way of spontaneous progress are so great, that there is seldom any choice of means for overcoming them; and a ruler full of the spirit of improvement is warranted in the use of any expedients that will attain an end, perhaps otherwise unattainable.

(1-10-06) Despotism is a legitimate mode of government in dealing with barbarians, provided the end be their improvement, and the means justified by actually effecting that end.

葉袋氏は大規模な灌漑事業を例に挙げ、これを達成するには多くの人を結集して力を発揮させる必要があり、そのために、成人男性に1週間の強制労働を課す以外に手段がないのであれば、統治者はこれを命じても正当化される——と云うのがこの文の趣旨だと述べる。ミルは「目的は手段を正当化する」という功利主義の枠組みで考えていることを想起させたかったと、葉袋氏は解説しているが、それでも is warranted in the use of any expedients とか barbarians という表現にはぎょっとさせられ、西洋人（文明）が東洋人（未開人）を支配（啓蒙？）するのを当然視する姿勢が（少なくとも筆者には）感じ取られる節があり、ミルの慧眼に瞠目するとともに、少し複雑な思いにもさせられる（『精読2』 pp. 110-116）。

論が進むにつれて、ミルの唱える功利主義がますます深く詳しく論じられていく。

(1-11-01) It is proper to state that I forego any advantage which could be derived to my argument from

the idea of abstract right, as a thing independent of utility. で、何故ミルは abstract right independent of utility ではなく the idea of abstract right, as a thing independent of utility と書いたのか？それは、ミルが読者にあるメッセージを伝えたかったからと、薬袋氏は詳細に分析していく。まず功利主義における utility と right の関係において right は4種類あるとして、それを個別に検証していく。ここでの解説議論も「超クドイ書き方」で為されているので読み進めるにはかなりの忍耐と辛抱が必要だが、論証の最後に、ミルは「正義は功利原則によって決まる」と考えていて、功利とは無関係な抽象的正義というようなものがあるとは思っていない」という結論が導き出されたとき、筆者は——依然としてミルの主張自体はよく分からないながらも——ある種の感銘を受けた。真の〈読む〉とはここまで徹底的に論理的に分析することで初めて達成しうるものなのかと（『精読2』pp. 123-136）。

御紹介したい箇所はまだまだたくさんあるのだけれど——というか、全篇啓蒙的であり、全篇英文精読鍛錬道場である——ここでふと思う。2巻600頁余を費やして、まだ第1章の講義を終えただけである。全5章解説し終えて全巻完結するのは、一体何時のことであろう？それまで気を長くして、取り合えずこの2巻を何度でも繰り返し反芻して英語読解力を高めることが、読者の「ライフワーク」となるのかもしれない。